

# 東海の古代

## 第273号 2023年5月

会長 : 畑田寿一  
 編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp  
 HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

### 馬の古代史

一宮市 畑田 寿一

「日本列島には魏志倭人伝に書かれているように古代は馬が居なくて、5世紀頃に朝鮮半島から輸入された。」とする説が一般的である。

しかし、東海地方を中心にそれ以前に馬が存在したと思われる証拠らしきものもあり判然としない。今回は蒲池明弘氏の『「馬」が動かした日本史』（文藝春秋、2020年）を参考にさせて戴き、馬の歴史に挑戦してみたい。

#### 1 5世紀以前に馬が居たとする痕跡

##### (1) 遺跡からの出土

佐藤虎雄氏の「古代牧馬の研究」（天理大学学報：1955年）に拠ると、馬は旧石器時代から日本に居た。弥生時代になると飼育された馬と思われる骨が愛知県を始め各地で出土している。

時 期	出 土 地	出土した物	備 考
旧石器時代	東北、関東、兵庫、福岡	蒙古系馬の骨	野生？
弥生時代	宮城県代々崎他	歯、骨	
	岩手県大船渡市細浦貝塚	頭骨	
	大阪府南河内	脚骨、歯	
	愛知県名古屋市熱田高蔵貝塚	歯、骨器	北方系馬？
	愛知県渥美郡田原町	歯	
	埼玉県、熊本県、鹿児島県	歯	
古墳時代	箸墓古墳	あぶみ	
	応神天皇陪塚丸山	馬具	

愛知県の高蔵貝塚の馬は体高が136cmで小型と考えられている。最近の研究では弥生時代の馬の飼育は否定されており、山梨県の塩部遺跡（4世紀後半）が飼育馬として最も古いと考えられているが、貝塚などの馬の骨をどのように考えるかは依然諸説がある。箸墓古墳は纏向学研究センターによれば3世紀前半となるが、3世紀前半説を否定する根拠と考えている学者もいる。

##### (2) 『日本書紀』の記述

馬の記述は「対馬」など地名を含めて神代から記述されているが、応神天皇期の「百濟王遣阿直伎、貢良馬二匹。」あたりが妥当であろう。4世紀中頃から馬が朝鮮半島から輸入され、5世紀には各地で飼育された。

## 2 東アジアの馬兜の歴史

馬の歴史を直接語るのは諸説が有り過ぎて困難であるので、馬が戦いの道具として使われた証しとして「馬兜」の歴史を眺めてみたい。

国	時代	遺跡
中国	紀元前5	湖北省で革製馬兜、馬甲出土
	4世紀頃	鉄製馬兜、馬甲、乗馬用鎧が普及
高句麗	4世紀頃	中国に合わせて、広開土王の時代に普及
新羅・伽耶	5世紀初	慶州南部を中心に出土
百済	——	出土なし
日本	5世紀後	和歌山県大谷古墳、埼玉県将軍山古墳から出土

(出典：神谷正弘「中国・韓国・日本出土の馬兜と馬甲」)

上記の表から、4世紀末頃の高句麗の南下に伴い、騎馬戦が通常化するにつれて、人も馬も甲冑が必要になり、国内でも盛んに作られるようになったことが窺われる。

## 3 国内の牧草地

国内には火山灰で覆われた「黒ぼく土」と呼ばれる土壌がある。この土地は酸性度が高く農作物の栽培には不向きであるが、馬の牧草地としては最適である。日向、木曾、甲斐、毛野、南部など、古来からの馬の産地も多くはこの地にあたる。

## 4 東濃・伊那地方での牧場

馬の飼育の状況として木曾駒の産地である東濃・伊那地方の牧場の状況を眺めてみたい。木曾駒は130cm程度で小柄であるが、気性もおとなしく、力持ちで農作業にも戦にも使える万能選手であった。明治以降絶滅寸前まで数が減ったが現在は140頭近くまで増えている。原産地は明確では無いが蒙古馬の系統と考えられており、4世紀頃に遡る可能性がある。木曾馬は美濃国恵那で放牧が始まり、5世紀には伊那地方に広がっていた。

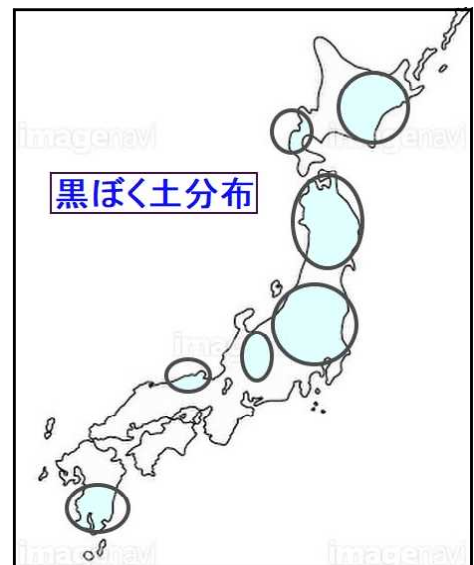
飯田地方は天竜川沿いに開けた場所で、天竜川の周囲には低い丘陵地が広がり、更に周囲から天竜川に流れ込む中小河川により丘陵地が分断される地形で成っている。その結果、丘陵地は四方が断崖の囲まれた台地になっており、馬を放牧するには最適な形状を成していた。各丘陵地には遺跡が存在し、遺跡からは馬の墓などが出土している。

地域	遺跡	出土品
坐光寺	新井原遺跡など	歯、轡、飾り鉾、締め具
上郷	宮垣外遺跡	歯、轡、飾り金具、鞍、締め具、雲珠
鼎	物見塚古墳	歯、轡
松尾	茶柄山古墳など	歯、三環鈴
高森	北林古墳	歯

飯田地方の住居跡では、朝鮮系カマド以外に伽耶地方の遺跡に類似した須恵器なども出土しており、横穴式石室の石積みは北九州のセストノ古墳と類似する。伽耶系渡来人が中心になり、放牧を行っていたのでは無からうか。

## 5 馬の実用速度

当時の馬がどの程度の速度であったかは論議が分かれている。根拠の多くは「延喜式」



からの推定が大半であるが、速足は15Km/時・1日1時間程度継続としている。ゆっくり歩く場合は30Km/日を基準であった。しかし、滋賀県文化財保護協会の研究では1区間を8Kmとし、もう少し早く伝達がされたと述べている。手紙程度であれば飛脚による方法と大差が無かった。

この計算では九州とヤマト間では3～5日程度で通信ができたことになる。

## 6 まとめ

### (1) 日本への移住者と馬

日本における馬の起源が縄文時代まで遡るとする説は疑問視されているが、その他の説としては中国からの大量の亡命者が連れてきたとする説がある。秦の始皇帝の時代の徐福伝説が史実であれば馬を連れてきてもおかしくない。

古代史の中で当時の中国と同じ文化を持つと思われる遺跡が突如登場し、周辺に浸透せずに消滅して行った例は多くあり、無視できない説であろう。

### (2) 5世紀以降の馬の飼育

5世紀の馬の代表的な飼育地は、日向（九州）と木曾（南信濃）、甲斐（信濃）、毛野（関東）であった。古墳が最も多く造られたのは関東であるが、信濃でも3,600基の古墳が造られた。飯田地方でも500基を超す古墳が存在し、47か所で馬具が出土する。馬の飼育は莫大な富をもたらした。

朝鮮半島の緊張が高まるにつれて傭兵に対する需要が高まり、日本列島が軍事大国化する姿は拙論（東海の古代270号「短甲からみる倭の五王の時代の軍事力」）で取り上げたが、軍事力を必要とする勢力が複数あり、それに呼応する状況の中で倭の五王の存在を考える必要がある。5世紀の姿を今一度眺め直す必要があるのではないか。

### (3) 東北の南部馬の登場

南部馬は15cm程度背が高く体格も立派であったので、平安時代には人気が高かった。戦闘馬としての用途が高まり、木曾馬は農耕馬としての価値を見出さねばならない状況に追い込まれ、次第に生産が下火になったと考えられている。南部馬は木曾馬などとは系列が違うと考えられてきたが、DNAなどによる判定の結果、現在では否定されている。寒さに耐えるため体格が立派になったのでは無いか。東北の蝦夷がヤマトの勢力と30年以上戦い続けた要因は南部馬にあるとする説を前述の蒲池氏は述べられているが、一考に値すると感じられる。

馬は古来から居た。弥生時代になると家畜化されたが、どの様な経緯でされたかは定説が無い。本格的に飼育されるようになったのは5世紀頃からで、戦争形態が騎馬戦になったためであろう。農耕馬の飼育は女性や子供の仕事で、おとなしくて人懐っこい日本の馬はこの環境で育まれた。馬の墓を殉死とする説が有力であるが、生活を共にした生き物を葬ったと考えたい。

## 天照神話の馬

名古屋市 石田 敬一

### 1 天照神話

古田武彦説によれば、対馬海峡が「天」の領域で、記紀の神代の記事に照らしつつ古田説を突き詰めると、別名を「天比登都柱」とする壱岐が「天」の中心、原初地であろうと思います。また、私は、天照大神が支配していた高天原は壱岐であると想像しています。

さて、『日本書紀』の神代には「故、素戔鳴尊、妬害姉田、春則廢渠槽及埋溝・毀畔・又重播種子、秋則捶籤・伏馬」（故に、素戔鳴尊は姉の田を妬み、春には水路を壊し溝を埋め、畔を壊し、また重ね蒔きをした。秋には、串を立て場所を奪い、馬を放って田を荒

らした。)と記されます。ここには水田稲作と馬がでてきます。

また、『古事記』の神代では「**穿其服屋之頂、逆剥天斑馬剥而**」(その服屋の頂を穿孔し逆剥ぎした天の斑文の馬を剥ぎ)と記されます。服屋(機織り)と天斑馬がでてきます。

すなわち、この天照神話には、水田稲作、機織り、馬が登場します。これらの天照神話が事実に基づいて描かれているとするならば、その舞台はいずこだったのでしょうか。

水田稲作と機織りについては、少なくとも弥生時代前期の日本列島の各地で行われていたとされますが、馬については、wikipedia「日本在来馬」に**古墳時代**にモンゴルから朝鮮半島を経由して九州に導入された蒙古系馬に馬の起源があるとされます。もし、この説明が正しいとすれば、天照神話は古墳時代の状況を反映したということになります。そこで、水田稲作、機織り、馬の3点について、古代の壱岐の状況を確認します。

## 2 水田稲作

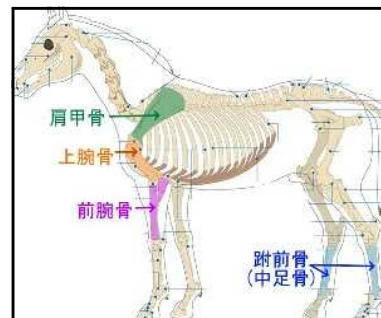
水田稲作については、北部九州では、紀元前10世紀ごろには始まっていたことが水田遺構の発見で明らかになっています。壱岐では、原の辻遺跡から、矢板を並べた水田畦畔跡を挟んで2枚の水田跡と水路跡など水稻農耕の遺跡が確認されています。イネのプラントオパールや農具も出土しており、弥生中期には、壱岐の河川流域の低地に水田が広がり、対馬に比べ水稻農耕が広く行われていたようです。

## 3 機織り

織物文化については、縄文時代の土偶「仮面の女神」や「遮光器土偶」に代表されるように土偶は服を着ていますから、すでに縄文時代に機織りが発達していたと思われます。壱岐では、原の辻遺跡から弥生時代の木製の機織り具の経巻具や骨製・土製の紡錘車が出土しています。弥生時代には機織りが行われていたようです。

## 4 馬

原の辻遺跡において、弥生中期の貝塚から他の獣骨とともに馬の肩甲骨、上腕骨、前腕骨(焼骨・尺骨)、跗前骨(中足骨)が出土しています。上層部から出土の馬の歯は弥生時代ではないようです。また、弥生中期のカラカミ遺跡の貝塚からも使役馬の跗前骨が出土しています。



動物考古学者の松井章らは、出水貝塚(鹿児島)や大崎貝塚(千葉)から出土した縄文馬とされる9遺跡14点の骨の試料をフッ素含有量の測定や、コラーゲンの放射性炭素(14C)による年代測定を実施した結果、14点全ての試料において中世・近世の時期のものが混入したものであるとしています。また、西中川(はやお)鹿児島大学名誉教授は、日本における馬文化の全国的な伝播は、古墳時代からとされていますが、これらは壱岐の弥生時代の馬の存在を否定するものではありません。

『漢書』朝鮮伝には、前漢(紀元前206年～後8年)に「**献馬五千匹**」とあり紀元前の朝鮮半島には多数の馬がいます。朝鮮半島南端の靺島(ヌクト)遺跡は、カラカミ遺跡と同じ地上炉の製鉄や弥生土器などが出土しており同一文化圏です。ですから、先に示した弥生時代の馬の調査や朝鮮半島の状況から、弥生時代の壱岐に馬が存在したことは疑えません。

一方で邪馬壹國の主たる比定地である北部九州や大和の遺跡では、弥生時代の馬の骨は出土しないため、天照神話は、弥生時代の壱岐を反映した話だったと考えられます。

## 5 倭人伝の記事

3世紀の倭人について記されている『魏志』倭人伝には、「**其地無牛馬虎豹羊鵲**」(其の地に牛・馬・虎・豹・羊・鵲は無し)とあります。この倭人伝の記事を信用すれば、3世紀の卑彌呼の都、邪馬壹國には牛馬などがいないことになります。つまり、天照神話は、3世紀の卑彌呼の時代を反映した伝承ではありません。

## 6 まとめ

先に示したとおり、「馬」に注目すれば、天照神話は、邪馬壹國の有力な比定地である北部九州や大和での出来事ではなく、卑彌呼の時代より随分と古い弥生時代の壱岐における出来事の反映だった可能性が高いといえるのではないのでしょうか。

私は、弥生時代の水田稲作と機織りとともに弥生時代の馬の骨が出土している壱岐が天照神話の舞台にふさわしいと考えています。

### 法隆寺の五重塔の心柱

名古屋市 石田 敬一

#### 1 田中英道説

最近は、聖徳太子の存在を否定するセンセーショナルな著書が多いです。

そうした中で、聖徳太子虚構説を批判したのが、東北大学名誉教授の田中英道著の『**聖徳太子虚構説を排す**』（PHP研究所、2004年）です。

田中英道は、本書において、原点に戻り法隆寺は本当に再建されたのかと疑問を提示し、再建論は不自然であるとして、聖徳太子虚構説の代表的な谷沢栄一や大山誠一、さらに怨念説の梅原猛の考えを批判しています。

私は、法隆寺再建はほぼ間違いがない事実と思いますが、本書では、現在の法隆寺は再建ではないという前提で考察されます。というのも田中英道説では、法隆寺には、現存する法隆寺と若草伽藍の2つの寺社が併存していたとして、現存の法隆寺は創建から現在まで変わらないままに存続しているという考えです。本書から抜き書きします。

「**元々今の法隆寺は斑鳩寺と呼ばれていた。若草伽藍が法隆寺であり、その焼亡後は、斑鳩寺が法隆寺になったと考えられるのである**」（189頁）

つまり、創建されたのは現在の西院伽藍であり、それが斑鳩寺と呼ばれていたとし、これと併存していた若草伽藍が法隆寺と呼ばれていたとします。若草伽藍が消失したため、これ代わって西院伽藍である斑鳩寺が法隆寺と呼ばれるようになったという考えです。やや詭弁のようにも思われますが、なるほど、これならば、若草伽藍焼失とは関わらずに、創建当時の少し前の594年に伐採された木を心柱に使用して、後に法隆寺となる西院伽藍を607年に創建したということになり、古い心柱の疑問が解消できます。

ただ、『日本書紀』天智天皇九年（670年）の記事には、「**夏四月癸卯朔壬申夜半之後 災法隆寺 一屋無餘**」（**夏四月三十日の夜半過ぎに、法隆寺で火災があり、建物が一屋も余すことなかった。**）とあります。たったこれだけの簡潔な記事ですが、素直に読めば、法隆寺のすべての建物が、一屋も残すところなく焼失したということになりはしないでしょうか。田中英道は、法隆寺と斑鳩寺は別の寺であって、燃えたのは法隆寺と呼ばれていた若草伽藍のみとしています。どうでしょうか。

もし、西院伽藍と若草伽藍が整然として同軸方向に並んでいれば2つの寺の併存説は確からしいと思われませんが、西院伽藍と若草伽藍の位置関係をみれば、若草伽藍が西院伽藍の南大門より北側に斜めに食い込むような配置となっており、併存していたとは思われません。田中説では、この西院伽藍が斑鳩寺と呼ばれていて、それが後に法隆寺と呼ばれたとしますがその主張の根拠は何もありませんし、建物の配置からみて、西院伽藍と若草伽藍が併存していたとするのは理解しがたいです。



また、田中説が正しければ、心柱だけが創建時のもので、そのほかの建築は補修材ばかりということになります。金堂にも創建時の木材が少しは残っていなければおかしいように思います。さらに、西院伽藍が斑鳩寺と呼ばれていたとしたら、法隆寺の焼失の1年前の天智天皇八年（669年）是冬条では「**于時災斑鳩寺**」とあり、その斑鳩寺は火災にあったと記されていますので、607年の創建時から西院伽藍があったとするならば、その火災の痕跡がなければなりません、西院伽藍には火災にあった痕跡はありません。

したがって、西院伽藍と若草伽藍が併存していたという田中英道の併存説には疑問符が付きます。

## 2 法隆寺と斑鳩寺

さて、法隆寺の火災と、その1年前の斑鳩寺の火災の2つの記事をどう理解するかです。法隆寺と斑鳩寺を別の寺社と考えるのか、同じ寺を指すと考えるかです。

そこで、他の文献を確認します。

『**上宮聖徳太子伝補闕記**』は、その序文によれば、聖徳太子の行実を調使と膳<sup>つきの</sup>臣<sup>かしの</sup>のそれぞれの家記に基づき記された伝記であり、平安時代初期に成立した著者不明の一冊です。

太子の誕生(574年)以後、皇極二年(643年)の上宮王家滅亡までの約70年間の記事を収録しており、その中に法隆寺の火災に関する記事も記されています。

この『補闕記』には、法隆寺の火災について「**庚午年四月卅日夜半有災斑鳩寺**」と記されており、庚午年の四月三十日夜半、斑鳩寺に火災があったとされます。庚午は西暦610年若しくは670年ですが、『補闕記』の期間にあたる庚午年は西暦610年の方です。

つまり、まだ太子存命のときに「斑鳩寺」が焼失したことになり、『日本書紀』の天智天皇九年とは一運り（60年）違っていることになります。田中説では斑鳩寺を西院伽藍としますが、『補闕記』の記事では、焼失したのは斑鳩寺すなわち西院伽藍になりますので、西院伽藍は創建以来焼失していないとする田中説と矛盾します。

また、『日本書紀』の「**災法隆寺**」の記事が、この『補闕記』では「**災斑鳩寺**」と記されており、『補闕記』の編者は、法隆寺と斑鳩寺は同じ寺を指すと考えていたようです。そこで、一般的には、法隆寺と斑鳩寺は同じ寺を指すとして、焼失した若草伽藍を創建法隆寺とし、若草伽藍が焼失したために、新たに法隆寺として西院伽藍を再建したとする説が大勢です。私もこうした考えが妥当ではないかと思えます。

## 3 焼失年

ただ、焼失年については『補闕記』に従って610年とするか、書紀に従って670年とするか、意見が分かれるところです。

西院伽藍に使用された木材の伐採年からすると、金堂が650年から669年までに伐採された木材が使用され、五重塔は心柱を除くと650年から673年までの伐採木、中門はそれ以降であり、西院伽藍の完成は、およそ8世紀初めと考えられます。

610年焼失説の場合、聖徳太子は存命ですから、なぜ太子は直ちに法隆寺を再建しなかったのか、大きな疑問が残ります。

聖徳太子が亡くなったあと、670年に焼失した法隆寺（斑鳩寺）は若草伽藍であって、それが焼失したために、あらたに法隆寺（西院伽藍）を建立したとする考えの方が順当のように思われます。

金堂	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上重の雲肘木が西暦六六一年</li> <li>・上重の尾垂木掛が六五一年</li> <li>・外陣の天井板が六六七～六六九年</li> <li>・庇の西側扉口北側の辺付が六五〇年</li> </ul>
五重塔	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心柱が五九四年（極端に古い）</li> <li>・二重北西の隅行雲肘木が六七三年</li> <li>・三重の垂木（南面 東から三十）が六六三年</li> <li>・裳階の腰長押が六五〇年</li> </ul>
中門	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初重の大斗二本のうち一本が六七八年</li> <li>・もう一本が六九九年（推定）</li> </ul>

## 4 再建

創建法隆寺は、通説では、若草伽藍であり、その創建は607年ごろと考えられています。通説通り法隆寺が607年に創建されたとすれば、木材の乾燥行程には相当の年数がかかりますから、594年に伐採された木材を607年に五重塔の心柱に使用したとする時間的経過は理解出来るところです。

ところが、『日本書紀』の記述に従えば、670年4月30日に法隆寺は焼失し、建物は一屋も余すところなく全焼したとされ、現存の法隆寺（西院伽藍）は、もとの法隆寺である若草伽藍の場所をずらして再建された建物だと考えられます。

また、平安時代に書かれた『七大寺年表』や平安時代末期に成立した辞書の『伊呂波字類抄』などには、和銅年間（708～715年）に法隆寺が建てられたとあり、670年の被災後、40年ほど経った710年前後に法隆寺の再建が終了したと思われまゝす。現法隆寺の西院伽藍は、和銅四年（711年）にほぼ完成していたというのが、現在の学界の一致するところのようです。

- (1) 和銅元年戊申、依詔造太宰府觀世音寺又作法隆寺。（『七大寺年表』）
- (2) 法隆寺七大寺内和銅年申造立。（『伊呂波字類抄』卷二）
- (3) 和銅元年戊申、建法隆寺。（『南都北郷常住家年代記』）
- (4) 和銅三年藤公建興福寺或記云法隆寺同比年建立。（『東寺王代記』）

従って、発掘調査からも文献上からも、現在の法隆寺は710年頃に再建されたことに間違いはないでしょう。

## 5 心柱の流用説と保管説

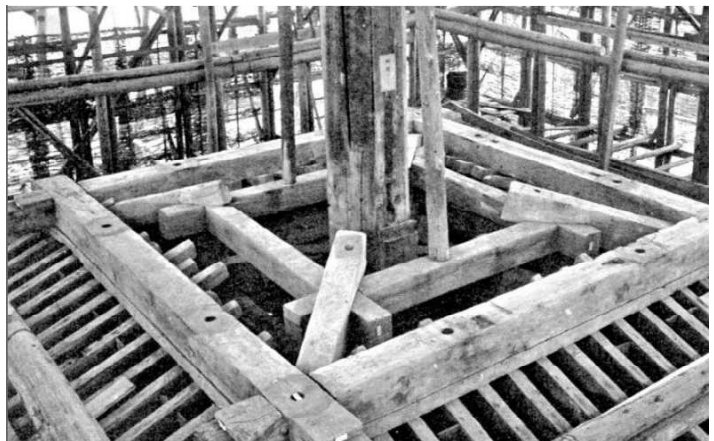
さて、ここで問題となるのが、再建された法隆寺の西院伽藍の五重塔の心柱に、594年に伐採された木材が使われていることです。この年代が正しければ、710年頃の再建までの期間が110年以上となり長すぎるように思われます。

このため、670年の火災の随分前に法隆寺が再建されていた可能性を指摘する説もあります。ただし、火災前の再建の理由がわかりませんし、594年伐採の五重塔の心柱以外の用材は、およそ650年から700年の間に伐採されたものですから、670年の火災の随分前に再建したとする可能性は限りなくゼロに近いと思われまゝす。

再建された法隆寺の心柱が古い時期のものである理由については、2つの説があります。一つは、他の古い寺院の心柱を再利用した、つまり移設や一部再利用などの「流用説」であり、もう一つは、伐採後、ずっと長い間、貯木・保存していたとする「保管説」です。

もちろん、火災以前に伐採された594年の心柱や金堂に使われた木材は、あらかじめ法隆寺の火災がいつ起きるかを予見できませんから、法隆寺のために事前に用意されたものではないでしょう。また、もし、これが他の建物で使われていた古材を移設など再利用したとすれば、伐採時期と再建時期に長期の時間的な隔たりがあっても、それはまったく違和感がありません。

昭和十六年（1941年）から実施された西院伽藍の五重塔の解体修理の報告書によると、心柱には他寺のものを再利用した痕跡はなかったとされます。このため他の寺社の木材を流用したとするにはやや難があると考えがちですが、五重塔の中心にある心柱は、驚くべき事に一番上である五層の屋根部分で支えられており、それ以外の一層から四層では、心柱の周囲は吹き抜けに



なっていて心柱に接している部分はありません。塔全体の荷重は、心柱の周りにある4本の四天柱と12本の側柱によって支えられていますから、心柱に古い加工の跡がないからと言って、ただちに流用説を排除はできません。

ちなみに、現存最古の慶雲三年（706年）創建とされる法起寺の三重塔の心柱は、敏達元年（572年）の伐採と推定されており、直径約70cmの八角形で、その太さは法隆寺の若草伽藍の心柱と同程度のものです。こうした事例があるので西院伽藍の五重塔の心柱が、原木伐採からおよそ百年後に使われたのはあり得ない話ではないということになります。というのも、直径70cm以上の檜で、つなぎ合わせたにしても長さが20m程度という大径長尺材は、滅多に手に入らない希少な物だからです。したがって、心柱が他で使われた解体材の流用や保管されていた木材を再利用したことは大いに考えられることです。

伐採時期や創建時期が『日本書紀』に記されていて可能性が高いのは、法興寺の移設に伴うものではないでしょうか。『日本書紀』によると、法興寺（飛鳥寺）は用明天皇二年（587年）に蘇我馬子が建立を発願したものと記され、崇峻天皇三年（590年）10月条には「山に入りて（法興）寺の材を取る」とあります。推古天皇元年正月15日（593年2月21日）の条には「法興寺の刹柱（塔の心柱）の礎の中に仏舍利を置く」との記事があり、翌日の16日（2月22日）に「刹柱を建つ」とあります。そして、推古天皇四年（596年）11月条には「法興寺を造り竟りぬ」との記事がありますから、推古天皇二年（594年）には、すでに法興寺の心柱は使用されています。

ところが、蘇我馬子が建立した法興寺は、平城京遷都（710年）とともに養老二年（718年）に新京に新築移転されて、寺名を法興寺から元興寺に改めており、このとき既に解体され保管されていたと思われる法興寺の心柱は、元興寺には利用されなかったようです。

私は、残された法興寺の心柱が、解体されたのちも保管されていて、これを焼失後の法隆寺（西院伽藍）の五重塔に再利用したのではないかと考えます。

## 6 まとめ

法隆寺の若草伽藍が焼失し法隆寺を再建するとき、法隆寺の五重塔の心柱には、聖徳太子とともに仏教を信仰した蘇我馬子発願の法興寺の心柱を利用するのが最も相応しいとして利用されたと思います。このとき法興寺の心柱は、法隆寺に転用された後だったので、元興寺には使用されなかったとすれば、その訳がわかるような気がします。

いずれにしても、地震の多い日本において、心柱による振り子の構造を考案し五重塔が1300年以上も倒れないようにした古代人の優れた知恵と技は、私たち日本人の誇りであるとともに、現在の法隆寺は、法起寺と並んで、594年に伐採された五重塔の心柱がある、世界最古級の木造建築であることを誇りしたいと思います。

### 前回の例会の話題

- ・筑城から探る7世紀の九州の政治情勢  
一宮市 畑田寿一
- ・息長氏について  
東海市 大島秀雄
- ・日本語も朝鮮語も上書きされた  
刈谷市 酒井 誠

### 例会の予定

- 1 日時 5月20日(土) 13時半～
  - 2 場所 名古屋市市政資料館
- 来月以降の例会  
全て土曜日 6/17、7/15

### 会員の投稿について

- 会報誌への投稿（編集担当：石田）  
toukaikodai@yahoo.co.jp
- 投稿締切り日 5月30日(日)

### 年会費の納入のお願い

- 1 年会費 5,000円(会報誌等送料込み)
  - 2 納入期限 2023年5月20日(例会予定日)
  - 3 振込先
- ・金融機関：ゆうちょ銀行
  - ・名称：東海古代研究会
  - ・店名：二一八 ・店番：218
  - ・口座：普通 1299395

**募集中!**